

蓮のたとえ

静かな水面の下、腐敗物が堆積する場所に、一つの種が眠っていた。

その周りでは、泥が暗闇に満ちていた。死んだものすべてがそこに集まっていた——死体、思考、壊れたもの。それは種にまわりつき、養分を吸い取り、悪臭を放っていた。虫たちが目もなく蠢いていた。泥の中には、光を求めるものは何もなかった。

種は光を知らなかった。

何も知らなかった。ただ存在していた——汚泥の中に埋もれた、小さく閉ざされた真実として。

時が過ぎたのか、過ぎなかったのか。種は柔らかくなった。ひび割れが生じた。柔らかな糸が、息をするようにゆっくりと伸び始めた。

それは下へ、泥の中へと伸びていった——求めることもなく、恐れることもなく、ただ成長していた。泥はそれを受け入れ、養分を与えた。腐敗は根となった。死んだものは、それを上へと押し上げる飢えとなった。

淡い茎が伸び上がった。

水面には、漂うものがたくさんあった——折れた羽、溺れた虫、剥がれた皮膚、排泄物。それらは音もなく、目的もなく漂っていた。

茎はそれらを通り抜けた。

掴むことも、しがみつくこともなかった。流れに押されると曲がり、流れが過ぎるとまっすぐになった。

魚がそれに触れた。影が上を横切った。一度、何かがその端をかじろうとした。しかし、それはすぐに癒えた。

水は澄んできた。

そして、薄くなった。

そして突然、水はなくなった。

茎は水面を突き破った。

空気がそれに触れた——重く圧迫するものではなく、軽やかで、広々とした、静かな空気だった。

水面の上で、茎は立ち止まった。思考からではなく、存在そのものから。

そして、ゆっくりと、蕾が開き始めた。

花びらは、息をするように柔らかく、下の泥に触れることなく外側へと開いていった。汚れは一切ついていなかった。水は花びらから流れ落ちた。腐敗物は何も残らなかった。

花びらは決して泥に属していなかった。

泥から生まれたが、泥そのものではなかった。

花は開いた。

歌うこともなく、名を名乗ることもなく、ただ存在した。

下には、泥が残っていた。

上には、花が立っていた。

清らかに。

完全に。

生き生きと。

—

The Parable of the Lotus

Beneath still water, in a place thick with rot, a single seed slept.

Around it, the mud swelled with darkness. All that had died gathered there — bodies, thoughts, broken things. It pressed close. It fed. It stank. Worms moved without eyes. Nothing in the mud reached for light.

The seed did not know light.

It did not know anything. It simply was — a small closed truth buried in filth.

Time passed, or did not. The seed softened. Cracks formed. A tender thread unfurled, slow as breath.

It pressed downward, into the muck — not seeking, not fearing — only growing. The mud welcomed it, fed it. Rot became root. What had died became the hunger that pushed it upward.

A pale stalk rose.

The water above was thick with drifting things — broken feathers, drowned insects, loose skin, excrement. They floated by, silent and aimless.

The stalk passed through them.

It did not grasp. It did not cling. It bent when currents pressed, straightened when they passed.

Fish brushed against it. Shadows crossed above. Once, something tried to nibble its edge. It healed.

The water grew clearer.

Then thinner.

Then suddenly, none.

The stalk broke the surface.

Air touched it — not thick and pressing, but light. Wide. Silent.

Above the water, the stalk paused. Not from thought, but from becoming.

Then, slowly, a bud began to open.

Petals peeled outward, soft as breath, untouched by the mud below. No stain marked them. The water rolled from them and fell. No rot clung.

They had never belonged to the mud.

They had come from it — but not of it.

The flower opened.

It did not sing. It did not name. It simply became.

Below, the mud remained.

Above, the flower stood.

Clean.

Whole.

Alive.